あざらし　　アイスランド

昔むかし。

ある朝早く、ひとりの男が、海岸の崖に沿って歩いていると、大きなほら穴の所に来ました。ほら穴の入り口には、あざらしの皮がたくさん置いてあって、中から、おどったりさわいだりしている音が聞こえました。男は、あざらしの皮を一枚ぬすんで、家に持って帰り、衣装箱に入れてかぎをかけておきました。

夕方、男がほら穴の前に行ってみると、美しい娘が、はだかで、そこにすわって泣いていました。男は、娘をなぐさめて、家に連れて帰りました。

やがてふたりは夫婦になり、たいそうなかよく暮らしました。子どもも何人か生まれました。ただ、妻は、ときどきぼんやりとすわって、海のほうをじっとながめていました。

ある日のこと、男はいつものように魚釣りに出かけましたが、衣装箱のかぎをまくらの下に置き忘れてしまいました。妻は、かぎを見つけ、何気なく衣装箱を開けてみました。そして、あざらしの皮を見つけました。

妻は、あざらしの皮を見ると、もうこれ以上ここにいる気になれませんでした。そして、子どもたちに別れを告げて、あざらしの皮を着るなり、海に飛びこみました。妻は歌いました。

わたしはうれしい　また悲しい
海にも七人の子　陸にも七人の子

そして、海のかなたへ泳ぎ去りました。

それからというもの、男は、釣りをしても何をやってもうまくいきました。ときどき、あざらしが男の船の周りを泳ぎまわりました。子どもが海辺に行くと、あざらしが出てきて魚や貝を投げてくれました。

それでも、妻は男と子どもたちのもとへは帰らなかったということです。

原話:『北欧の民話』山室静編著／世界文化社
再話：村上郁